くらしき作陽大学人形劇団
「ぱれっと」
チャリティ公演

くらしき作陽大学子ども教育学部附属児童文化部「ぱれっと」は、大学を飛び出して子どもたちに人形劇やパネルシアター、歌遊びなどを届ける学生劇団です。

今回、くらしき作陽大学の協力のもと、平成29年７月九州北部豪雨で被害に遭った子どもたちへの支援のため、チャリティ人形劇を開催します。

- **日時**　10月９日（月・祝）
  ①11時～ ②13時～
- **場所**　市民図書館集会室
- **定員**　100人程度
- **料金**　無料

※当日会場に支援金募金箱を設置していますので、皆さんのご好意として入場時に寄付をお願いします。

- **「ぱれっと」ホームページ**
  http://www.ksu.ac.jp/childhood_education/pallete/

なお、いただいた支援金は、人形劇公演の開催など被災地で子どもたちを元気づける支援活動を行う団体に直接渡します。後日、広報紙、市ホームページで報告します。

《今後のお知らせ》

- **「ちくしの人形劇まつり」**
  11月26日（日）、10時～15時
  前売り券販売は11月5日（日）、10時～16時、市民図書館エントランスで行います。
- **問い合わせ先**　市民図書館
  ☎（９２８）４９４３

TUNAGU II（つなぐII）

人はどんなにでも・・・

そのだ　ひさこ

私は戦争を知らない。１０００グラム台の低出生体重児として８カ月でこの世に生まれ出てはいたが。今年、戦後72年目の８月のテレビ報道では、今までになく戦争に関する特集が組まれているように思えた。戦争を経験された方々の存命者がほんとうに少なくなってきているからでもあろうと。

存命者の貴重な証言に加えて、新しく発掘された貴重な資料や映像が駆使されていた。何気に観ているだけで、知らないことばかりで驚嘆すると同時に恥ずかしいとも思った。

今まで、引き揚げ港・博多にかかわる史実の資料をさがし、数年かかって生存者を捜し求め、かけがえの無い証言をいただき、誰にも解るように短い読み物教材をつくって授業をしてきた。沖縄にも現地学習に行き、「ガマ（洞窟）」のなかで泣く赤ん坊をだきしめ、生死の限界にまで迫られた日本兵に追いつめられ、水のなかを奥へ奥へ・・・おぼれ死んだ母子の話。

日本（本土）の防波堤とされた沖縄のことは同僚たちと少しは学んできた。けれど、北の防波堤・樺太玉砕のことは何も知らなかった。樺太玉砕の命令、５０００人以上の死。終戦後、住民の多くは犠牲になっていた。

なかでも衝撃だったのは、「生きて虜囚の辱めを受けず」と、中学の教員だった父親が妻子６人の命を次々と奪い、最期に自分も自刃した事件。戦時の電話交換手という大切な仕事をしていた19歳の女性が日本への引き揚げに加わらず、最期まで電話交換の仕事を完遂。残った交換手６人の女性たちはソ連軍上陸前に全員自決。敗戦後の逃避行で歩けない幼い子どもをかかえていた家族の手りゅう弾での自死。

悲惨なことはまだある。帝国大学の医師たちが関与した、生きた捕虜たちの生体実験。そのことを学会に発表した論文なども明らかにされていた。ペスト菌、コレラ菌など細菌爆弾も製造され、捕虜の上に散布されていた実験も。

せっかく生まれてきた命、一度きりの命。なぜ！なぜ！と、うめきに似て自問する。自決、玉砕・・・なぜ、そこまで！どうやってそこまで！子どもまでそういうふうに！国策や教育の恐ろしさを思わないことはできない。

人は変わる。どんなふうにも優しく、あたたかく、誇らしくもなる。けれど、どんなふうにも、みにくく、貧しく、残酷にもなりうる。

人はどんなふうにも変わる、変われる。人権問題できれいごとを言っても、人権侵害を無くす力にはならないと思いつづけてきた。自分（たち）の無力を痛感しつつ、それでも、真実にふれ、命ゆたかに実らせる教育をこそと思う。

- **問い合わせ先**　教育政策課
  人権・同和教育担当

問い合わせ先で電話番号を掲載していない課・担当などは、市役所本庁 ☎ (923) 1111 にお願いします。